空間不変化詞の中核語義からの一方向的なメタファー拡張と語彙的な意味の広がり

石井 康毅
東京外国語大学大学院 地域文化研究科 博士後期課程

概 要

英語の不変化詞[1]には，物理空間に関するプロトタイプ的な概念であるイメージ・スキーマが中核語義として存在し，(1) それを体現する狭義の字義表現，(2) 言語共同体が共有する概念メタファーを通して理解されるが成人母語話者はメタファーとは意識しない語彙化されたメタファー，(3) 狭義のメタファーという区分が設定でき，ここには中核語義からのメタファー拡張の関係がある．

1 メタファーと空間不変化詞

本稿では，字義通りの意味が属するドメインとは異なるドメインに属する事物を本来的に指し，百科的・文脈的・経験的知識の参照を必要とするという必要条件により，メタファーを伝統的な解釈よりも緩やかにとらえる．

Lakoff & Johnson[1] 以前は，メタファーは特別な修辞表現だと考えられ，現在でも一般的にはそう考えられることが多いが，彼らは，メタファーはそう認識されずとも非常に頻繁に用いられ，実は表層的な言語のみならず思考や行動にも幅広く見られるものであるということを明らかにした．その理論の中でも重要なものが，概念間の対応関係を述べた「概念メタファー」(conceptual metaphor) である．概念メタファーは，空間概念[2]が基盤となり，それらが複合し，さらに現実世界の事物の構造と組み合わさり，複数のドメイン間の類似性を述べたものが言語共同体内で定着したものである．本稿で議論の対象とする空間に関するメタファーは，(1) に見られるように不変化詞を伴う表現 (動詞+前置詞句/副詞，前置詞+名詞句) で表現されることが多い．

(1) a. That argument *has holes in it.*[1, 92]
　　b. I'm feeling *down.*[1, 15]

これらの表現を生成・理解するために，AN ARGUMENT IS A CONTAINER(1a)・HAPPY IS UP; SAD IS DOWN(1b) という概念メタファーが用いられる．

2 不変化詞の意味のモデル

語の意味は伝統的には sense(概念的意義) と reference(指示的意味) に大別されるが，不変化詞の持つ意義は，名詞などの開いた類の意義とは性格が異なり，経験から抽出された概念的なプロトタイプしてのイメージ・スキーマ[3]だと考えられる．かなり具体的な典型例がプロトタイプとして中心になるカテゴリー[4]とは違い，不変化詞の場合には非常に抽象的な関係がカテゴリーを形成しているからである．また，不変化詞の意義は抽象概念だけで概念化することはできず，あくまで経験に基づく概念であるという違いもあるが，議論を簡便にするため，本稿では不変化詞は意義を持つとする．

このことを踏まえて，本稿では不変化詞の意味と表現の対応のモデル (表 1) を提案する．なお，この分類は区分が明確であるということを意図したものではなく，狭義の字義表現・語彙化されたメタファー・狭義のメタファーは連続的推移を成していると考えられる．

表 1: 不変化詞の意味と表現の対応のモデル

<table>
<tr><td>意義</td><td colspan="3">イメージ・スキーマ (トポロジー的継承を伴う)</td></tr>
<tr><td rowspan="2">意味構成上の追加的要素</td><td rowspan="2"></td><td colspan="2">概念メタファー</td></tr>
<tr><td></td><td>関係性の創造・希薄化</td></tr>
<tr><td>対応する表現</td><td>物理空間中の具体物の関係 (狭義の字義表現)</td><td>語彙化されたメタファー，句動詞</td><td>狭義のメタファー，イディオム</td></tr>
<tr><td rowspan="2"></td><td colspan="2">広義の字義表現</td><td></td></tr>
<tr><td></td><td colspan="2">広義のメタファー</td></tr>
<tr><td>共起語彙の偏りを生み出す制約</td><td>物理空間中の事物の存在</td><td colspan="2">ドメイン間の関係性</td></tr>
</table>

語彙化されたメタファーは成人母語話者にとっては，もはや比喩的に拡張されているという意識はなく，言われて考えてみれば追認できるというものであり，語彙化

Yasutake Ishii (ishii.yasutake.dpd@tufs.ac.jp)
Graduate School of Area and Culture Studies, Tokyo University of Foreign Studies

[1]空間の意味を持つ前置詞とそれと同形の副詞 (turn *over*, give *up*, etc.) を合わせて，本稿では「不変化詞」と呼ぶ．

[2]CONTAINER，SOURCE-PATH-GOAL など．

[3]個々の具体的な事象から個別部分を捨象し，共通部分を抽象して得られる超抽象イメージ．

[4]例えば robin が bird のプロトタイプとされる．

されたメタファーの意味は狭義のメタファーではなく，(広義の) 字義表現と考えることが妥当である．

2.1 狭義の字義表現

狭義の字義表現は，空間の概念である不変化詞の意味のプロトタイプとしてのイメージ・スキーマを体現し，トラジェクター・ランドマーク・運動/存在様態が客観的・物理的・具体的である事象を指す表現である．なお，イメージ・スキーマはトポロジー的性質[5]を持つため，イメージ・スキーマの図式と厳密に同じ空間構成でなくても，同じ構成と認知される．

(2) The blind is *down*. 「ブラインドは下がっている.」(物理的なブラインドが客観的に下がっている．)

(3) The shop is *across* the street. 「店は通りの向こう側だ.」(物理的移動は伴わないが，*across* のイメージ・スキーマの到達点部分を特に焦点化している．)

事象の物理空間内での存在という制約さえ満たせば，自由な文脈で用いることができ，共起語 (動詞・補部名詞句) の交換可能性は高い．

2.2 語彙化されたメタファー

語彙化されたメタファーはイメージ・スキーマとそのトポロジー的継承に加えて，多くの場合，広く母語話者に共有される概念メタファーに基づく表現であり，主体的な事物の把握がより重要になる．

(4) She is *in* white today. 「彼女は今日は白い服を着ている.」(全身白の衣服でなくても，白の衣服という概念主体の頭の中の抽象的領域に属していると認識している．)

(5) I'm *down* with flu. 「風邪で寝込んでいる.」(健康な状態がランドマークで，BAD IS DOWN という概念メタファーが用いられている．)

言語共同体で共有される概念メタファーによる制約を受け，共起語の交換可能性は低い．句動詞は，動詞と不変化詞それぞれの文字通りの意味と，(多くの場合複数の) 概念メタファーが組み合わさって意味が構築されることから，語彙化されたメタファーの中でも表現が固まったものと考えられる．

成人母語話者にとっては，狭義の字義表現と語彙化されたメタファーから成る広義の非メタファー部分が解釈の際のデフォルト域であり，ほとんどの言語運用はこの中に含まれる．しかし，語彙化されたメタファーは，(1) プロトタイプとしてのイメージ・スキーマの体現事例ではない，(2) 非常に使用頻度の高い (広義の) メタファーと考えられるが有標ではない，(3) 成人母語話者は直接処理[6]すると考えられるが，それは (その場で意味が構築されなくてはならない狭義のメタファーとは違う) 高度に慣習的な語彙化された意味だからだと考えられる [2, 295]，(4) 幼児・学習者は習得途中の段階では理解・使用に困難を示し，イメージ・スキーマの (認知能力に基づく) 習得と概念メタファーの学習の後に理解が容易になると考えられる，という 4 つの理由から，著者は語彙化されたメタファーは，イメージ・スキーマが言語共同体において重要な概念メタファーと組み合わさり，慣習化された意味であると主張し，語彙化されたメタファーを狭義の字義表現とは区別する．

2.3 狭義のメタファー

狭義のメタファーは概念メタファーでは単純には得られず，命題の真偽判定により偽と判断されることから基本的に命題レベルの表現であり，間接処理され，有標性が高く，一般的な意味での「メタファー」である．

(6) God is *in* the details. 「神は細部に宿る」

狭義のメタファーは，発話者の自由な発想に基づく新たな関係性の創造によって表現されたものであり，共起語の交換可能性は高いが，間接処理されるため必ずしも発話者の意図が正確に伝わるとは保障されない．

一方，やはり概念メタファーに基づいてはいるが，それが言語共同体からの忘却などにより希薄化し，表現だけが固定的に残っているものがイディオムであり，共起語の交換可能性は最も低い．通常イディオムはいわゆるメタファーとは違い，部分の意味からは全体の意味が引き出せないとされるが，心理言語学の研究により，多くのイディオムにおいてメタファーが大きな機能を果たしていることが明らかになっている [3]．

2.4 一方向的な拡張

これまでメタファー「拡張」と呼んできたものは，厳密には，(A) 言語的拡張[7]，(B) 解釈の現場での拡張[8]，(C) 習得時の拡張[9]に分けられる．多くの研究では拡張の起点が中核語義だということが当然とされ，拡張の方

[5] 形が違っていてもそれを問題にしないという性質を，認知意味論でこう呼ぶ．

[6] 字義通りの意味を計算して，それが偽であると分かってから比喩的な意味を探るという過程 (間接処理) を経ない処理方法．

[7] 表 1 に見られるような，共時的に特定の語の意味を取り上げた時に論じられる拡張関係．

[8] 狭義のメタファーの処理時や，子供や学習者が未習得の比喩的な意味に直面した時に行う拡張．

[9] 言語習得段階で見られる，比喩的な側面を持つ意味を新たに習得する時に見られる拡張．

向性はあまり議論されていない．しかし本稿では，様々なデータをもとに，習得は必ずしもプロトタイプから始まるとは限らないが，不変化詞の意味の比喩拡張は，全ての拡張において，物理空間に関するプロトタイプ的な意味から比喩的な意味への一方向的なものだと考える．

3 分類の例証

3.1 成人母語話者

成人母語話者の不変化詞の扱いには拡張 (B) が見られる．解釈モデルでは直接処理モデルも間接処理モデルも，狭義の字義表現にアクセスするとされる [2, 295-297] ことから，成人母語話者が語彙化されたメタファーを理解する場合でも拡張関係があると考えられる．

BNC における使用状況 (表 2) を見ると，狭義の字義表現，語彙化されたメタファー，そして本稿では語彙化されたメタファーに分類されると考える時間の表現が広く見られる．しかし，不変化詞の意味を spatial(*at* the library)，temporal(*at* 10 p.m.)，abstract(*at* least)，phrasal verb(look *at*) に分類した上で，米国の母語話者の大学生に，指定した不変化詞を使って自由に作文させるという Rice[4, 148-152] の実験結果 (表 3) を見ると，空間の意味が想起される割合が明らかに高く，空間に関する意味がプロトタイプであるという主張が支持される．

表 2: BNC で *in*/*at* と共起する名詞・動詞上位 20 項目

in		*at*	
in + NP	V + *in*	*at* + NP	V + *at*
way	be	time	look
case	come	end	be
fact	live	home	stare
year	go	moment	arrive
area	work	level	aim
country	find	stage	work
world	use	point	glance
time	do	school	smile
Britain	result	work	start
London	read	rate	stand
form	see	night	sit
place	get	beginning	stay
mind	hold	age	do
life	set	top	hold
sense	sit	back	come
day	make	meeting	go
chapter	lie	cost	get
Europe	appear	risk	laugh

3.2 幼児

第一言語習得期の幼児の不変化詞の扱いには拡張 (B)(C) が見られる．概して言語習得期の幼児は，多くの空間不変化詞を字義通りの物理的な意味から習得していく傾向がある．幼児は周囲の成人の発話から言語を習得するため，早い段階で頻度の高い語彙化されたメタファーを覚えて口にすることもあるが，それはその意味を理解して真に「習得」しているわけではない [5] ため，語彙化されたメタファーを物理空間の意味に誤解することもある [6, 138]．Mandler[7] も，子供はまず知覚や感覚運動的な手順により身の回りの事物や事態を認識し，細部に関する情報はそぎ落としながらも空間的な構造をその本質的部分として保持し，イメージ・スキーマの形に構築するということを実験により示した．

表 3: 米国の大学生の作文中の不変化詞の意味の分布

	Spatial	Temporal	Abstract	PV	TOTAL
at	57	21	16	9	100
on	57	9	28	6	100
in	60	7	33	–	100

表 4 は，子供の話し言葉コーパスである The CHILDES database から，各年齢期における *in* の補部名詞句の上位 20 項目を抽出したものである．子供は句を成句的に覚えて使う場合も多いということを差し引いても，特に年齢が低いほど物理的な容器状の空間を指す (*in* another house 等) 例が多いが，年齢が上がると少し拡張された例 (stay *in* order 等) も見られるようになる．さらに，動詞として非常に汎用的で基本的な繋辞である be 動詞が使われている be+*in* のパターンの 43ヶ月-54ヶ月の子供の用例 329 例を確認した結果，そのうちの約 300 例は「(物理的に) 何かの中に」という物理的空間に関する意味を持つ狭義の字義表現であった．これは，子供は不変化詞 *in* を専ら物理的空間に関する意味で用いるということを示している．

3.3 学習者

学習者の不変化詞の扱いには拡張 (B)(C) が見られる．学習の順序は教科書等での出現順となり，意味の連続性がとらえにくい[10]ため，学習者は各不変化詞を 1 つの語としてイメージが形成できない．また，句動詞・イディオムに関しては，学習者は項目ごとに訳語を暗記しようとする傾向がある．例えば，“look *for*”は「探す」と覚えるため，“Let’s look *over* the report.”という文は不変化詞 *over* のイメージ・スキーマがあればさほど困難で

[10] 例えば日本の中学 1 年生用の教科書 (東京書籍の New Horizon English Course 1) では，*in* は live *in* Australia, *in* the afternoon, *in* summer, play *in* the snow という順で，*at* は *at* home, get up *at* seven, look *at*, swim *at* the beach, *at* night という順で，そして *on* は *on* Mondays, (your cap) is *on* your head という順で現れる．

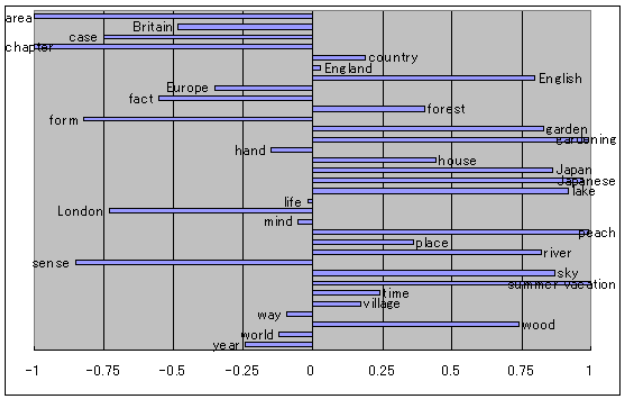
表 4: 各年齢期における *in* の補部名詞句上位 20 項目

-31		31-42		43-	
box	84	house	89	house	72
house	83	water	76	water	61
water	71	bag	66	room	57
bed	67	bed	66	school	54
room	52	room	54	car	47
bag	50	box	48	bed	44
chair	48	mouth	44	bag	41
car	47	kitchen	38	back	38
minute	47	car	36	front	36
zoo	25	hand	29	box	32
mouth	21	minute	29	morning	32
cup	20	crib	22	middle	29
kitchen	20	chair	20	kitchen	28
mommy	20	sky	20	mouth	28
pocket	20	hole	19	hand	26
wastebasket	20	corner	18	pocket	24
air	19	front	17	chair	21
closet	18	trunk	17	minute	21
hole	18	middle	16	mirror	21
bath tub	16	pot	16	sky	21
garage	16	truck	16		

ないはずなのだが，“look *over*”という項目の訳語を知らない学習者は理解できない．同様に，*about* は「〜について」という意味しか知らずに場所の解釈はできず，*on* に至っては断片的な意味しか分からないという．[11]

実際の使用のデータでも不変化詞の使用に違いが見られる．図 1 は学習者と母語話者の *in* の補部名詞句の使用の分布を示している[12]が，学習者が *in* の意味を母語話者と同様にはとらえていないということが分かる．

図 1: 名詞句の分布



学習者はインプットが少なく，経験から帰納的にイメージ・スキーマを構築することはできない．また，イメージ・スキーマを理解した学習者であっても，概念メタファーにはほとんど注意が向けられず，明示的にも暗黙的にも学習しないことが多いため，語彙化されたメタファーに困難を覚える．類推や母語に存在する近い概念メタファーを利用して語彙化されたメタファーを理解できる場合もあるが，自ら発信するためには，慣習化された概念メタファーの習得が必須だと考えられる．さらに，前置詞の意味の広がりは大きいが，慣習により強い制約を受けており [6, 138]，これらが複合的な要因となって学習者は空間不変化詞に困難を覚えると考えられる．

4 今後の課題

通常は通時的な変化は習得順序や共時的な意味の構造とは無関係だが，不変化詞に関しては一定程度の同質性が認められるため，通時的な議論も必要である．また，句動詞・イディオム等も含む動詞句のレベルでの包括的な議論を行い，言語表現一般との関係を明らかにしたい．

謝辞

本研究は，平成 14-16 年度文部科学省科学研究費 (基盤研究 (B)(2)) による研究「全電子化検定済み教科書データの解析と大規模日本語コーパスの構築」(研究代表者: 佐野洋) と平成 16-17 年度文部科学省科学研究費 (基盤研究 (C)(2)) による研究「ESP 教材の提供を目指した英語 e-Learning の研究開発」(研究代表者:高橋作太郎) の援助を受けている．

参考文献

[1] Lakoff, G. and M. Johnson. 1980. *Metaphors We Live By*. The University of Chicago Press.

[2] Blasko, D. G. and C. M. Connine. 1993. “Effects of Familiarity and Aptness on Metaphor Processing”. In *Journal of Experimental Psychology: Learning, Memory, and Cognition*, Vol. 19, No. 2, pp. 295-308.

[3] Gibbs, R. W. 1992. “What Do Idioms Really Mean?” In *Journal of Memory and Language*, 31, pp. 485-506.

[4] Rice, S. 1996. “Prepositional Prototypes.” In Püts, M and R. Dirven. eds., *The Construal of Space in Language and Thought*, Mouton de Gruyter, pp. 135-165.

[5] Friederici, A. D. 1983. “Children’s Sensitivity to Function Words during Sentence Comprehension.” In *Linguistics*, 21, pp. 717-739.

[6] Jespersen, O. 1964. *Language: Its Nature, Development, and Origin*. Norton.

[7] Mandler, J. 1991. “Prelinguistic Primitives.” In Sutton, L. A. and C. Johnson, eds., *Proceedings of the Seventeenth Annual Meeting of the Berkeley Linguistics Society*, Berkeley Linguistics Society, pp. 414-425.

[11] これらの例は著者が高校生に英語を教えていた時の経験による．
[12] 値が–1/+1 に近いほど学習者の過少/過剰使用を示す．